

日本語の文章における丁寧体と普通体の 混用に関する研究の概観

——「混用」という用語の扱いについて——

黒 木 晶 子

1. はじめに

日本語の文章において、文体に着目した場合、丁寧体もしくは普通体のいずれかで書かれていることが一般的である。特に、小論文作成の指導においては、同一文章中に異なる文体が混用されることは望ましくないとされ、丁寧体と普通体のいずれかに文体を統一するように指導されるのが通常である¹⁾。

しかしながら、実際に書かれた文章を観察してみると、(1)のように、丁寧体と普通体が混用されている例をしばしば見かける。

(1) もしかしたら、私は三度のゴハンより電話が好き……かもしれない。

とにかく、楽しい。^{しゃべ}喋り始めたら、もう止まらない感じ。だから、月々の電話料金はかなりの額に上ります。

(野中柊『テレフォン・セラピー』新潮文庫、p. 57)

本稿では、このような、実際の文章における丁寧体と普通体の混用の実態を明らかにする考察の一段階として、先行研究における丁寧体と普通体の混用の扱い、特に、丁寧体と普通体の混用に関する用語および混用の中身に焦点を当てて概観する。混用に関する用語および混用の中身が先行研究においてどのように扱われているかを検討することにより、丁寧体と普通体の両方が一つの文章にあらわれる混用という事象がどのように捉えられているかということの基本的なところを明らかにすることができると思われる。

2. 先行研究における丁寧体と普通体の混用の扱い

2.1. 対象とする先行研究

日本語の文章・談話における丁寧体と普通体の混用を扱った先行研究は、主として、会話におけるスピーチレベルシフト²⁾について分析した研究と、会話以外のデータ（主として書きことばであるが、話しことばを文章化したものも含む）における丁寧体と普通体の混用を扱った研究とに分けられる。本稿では、後者の、会話以外のデータにおける丁寧体と普通体の混用を扱った研究について概観する。

取り上げた先行研究は、メイナード（1991）、野田（1998）、メイナード（2000）、熊谷（2001）、黒木（2002）、メイナード（2004）、石黒（2005）、黒木（2006）、日本語記述文法研究会（2009）、中村（2011）、中村（2012）である。

2.2. 用語とその定義

先行研究において、丁寧体と普通体の混用をどのような用語で表しているのかについて見たところ、表1のような結果となった。

表1 先行研究における用語

用語	研究（発表年順）
混用	メイナード（1991）、野田（1998）、メイナード（2000）、熊谷（2001）、黒木（2002）、石黒（2005）、黒木（2006）、中村（2011）、中村（2012）
文体（の）混用	メイナード（1991）、熊谷（2001）、中村（2011）、中村（2012）
文末混用	メイナード（1991）
スタイルの混用	メイナード（2004）
スタイルシフト	メイナード（2000）、メイナード（2004）
交ぜ書き	石黒（2005）
文体の混在	日本語記述文法研究会（2009）

表1にあるように、今回取り上げた先行研究では、「混用」「文体混用」「文末混用」「スタイルの混用」「スタイルシフト」³⁾「交ぜ書き」「文体の混在」という用語が使用されている。

そのうち、日本語記述文法研究会（2009）を除く先行研究のいずれにおいても、「混用」「文体混用」「文末混用」「スタイルの混用」というように、「混用」という用語が使用されている。ただし、これらの先行研究では、「混用」という用語についての定義は、熊谷（2001）を除いて、なされていない⁴⁾。2.3で見るように、

今回取り上げた先行研究では、調査対象が文末における丁寧体（「です・ます」体）と普通体（「だ・である」体）である研究が大半を占めることから、「混用」「文体混用」というと、必然的に文末における丁寧体と普通体の混用であると認識されており、改めて定義する必要はないとされているのではないかと考えられる。

2.3. 調査対象とされている混用の中身

次に今回取り上げた先行研究において、具体的に何の混用に焦点が当てられているかを見たとこ、表2のようになった。

表2 先行研究において調査対象とされている混用の中身

	混用の中身	研究（発表順）
丁寧体が基調の文章に普通体があらわれる場合	「デスマス」体の中にダ体が混用されている場合	メイナード（1991）、メイナード（2004）
	「です」、「ます」を使っていない形文が基調の「ていねい調の文章・談話」の中に、「です」、「ます」を使わない「中立形の文」が混じる場合	野田（1998）
	「ですます体」を基本とした文章に「非ですます体」の文が混用されている場合	熊谷（2001）
	丁寧体基調の文章に普通体があらわれる場合	黒木（2006）
	丁寧体基調の談話に普通体があらわれる場合	日本語記述文法研究会（2009）
	「です・ます」体が基調の文章に「だ・である」体が混用されている場合	中村（2011）
普通体が基調の文章に丁寧体があらわれる場合	「です」、「ます」を使わない中立形の文が基調の「中立調の文章・談話」の中に、「です」、「ます」を使った「ていねい形の文」が混じる場合	野田（1998）
	「非ですます体」を基本とした文章に「ですます体」の文が混用されている場合	熊谷（2001）
	＜だ体＞を中心とするスタイルに＜です・ます体＞が混用される場合	メイナード（2000）、メイナード（2004）
	普通体基調の文章に丁寧体があらわれる場合	黒木（2006）
	普通体基調の談話に丁寧体があらわれる場合	日本語記述文法研究会（2009）
	「だ・である」体が基調の文章に「です・ます」体が混用されている場合	中村（2012）

丁寧体と普通体のどちらが基調であるかを問題にしている場合	丁寧体と普通体のどちらが基調であるかを問題にしていない場合	黒木（2002）、石黒（2005）
	丁寧体と普通体の文がほぼ同数あらわれる場合	黒木（2006）

表2から、今回検討した先行研究では、混用の取り上げ方として、文体の混用を取り上げているものと、形式の混用を取り上げているものの大きく二つに分かれることがわかる。

一方の、文体の混用を取り上げているものの大半は、丁寧体と普通体のいずれかが基調となっている文章・談話における、もう一方の文体のあらわれ方を見るというものであることがわかる。

もう一方の、形式の混用を取り上げているものは野田（1998）であるが⁵⁾、野田氏は「だ・である」形に、ていねいさ考慮の「非ていねいの機能をもつ非デスマス形」と「ていねいさ非考慮の機能をもつ非デスマス形（中立形）」の二種類があることを指摘しており（p. 99）、後者の中立形としての「だ・である」形と「です・ます」形の混用を取り上げている。このような混用は、野田氏が言及しているように⁶⁾、特定の読み手を対象としていない文章において特徴的であると考えられる。

3. まとめ

2.2で見たように、今回取り上げた先行研究では、丁寧体と普通体が一つの文章で両方用いられている事象について「混用」という用語を使用しているものが大半を占めていた。

これについては、今後より多くの先行研究を調査対象として検討していく必要がある。また、各研究の発表年との関係という点でも今後見ていく必要があるだろう。というのが、メイナード（1991）、メイナード（2000）、メイナード（2004）のように、同じ筆者による研究でありながら、また考察対象も重なっていないながら⁷⁾、用語が異なる場合も見られるからである。

さらに、「混用」という用語の使用に関しては、考察対象としているものが会話データか否かという点を考慮する必要があると考えられる。すなわち、談話参加者のやりとりの進行に応じて、それぞれがスピーチレベルを切り替えていくことになる会話を対象とするか、書き手が全体を書き、その一まとまりの文章の中で、

丁寧体と普通体の両方を用いることにより、文体が混ざった状態でまるごと読み手に提示されるという状況である文章、という違いである。この違いが、「混用」という用語に反映されているとも考えられる。

特に、2.3で見たように、基調となる文体があつてそこにもう一つの文体が混用されることにより、少数派の文体の文が目立つことになる。この目立つということとは、混用という捉え方の中で明確になってくることではないか。

引き続き、各先行研究における丁寧体と普通体の混用の扱いについて検討を進めたい。

注

- 1) 沖森・半沢（1998）では、文体の種類として、「だ」調・「である」調（常体）と「です・ます」調・「であります」調・「でございます」調（敬体）の二つを挙げ、常体と敬体の混用は避けるべきであることを指摘している（p. 16）。
- 2) 宮武（2009）は、日本語会話を対象とした先行研究を取り上げ、言語形式の丁寧度についての先行研究での扱いに関して詳細に検討している。本稿では、宮武（2009）に従い、「スピーチレベル」を「言語形式の丁寧度を指す用語」（p. 311）として、「スピーチレベルシフト」を「当該の談話において言語形式の丁寧度が変化する現象について表す用語」（p. 307）として使用する。
- 3) メイナード（2000）では、「スタイルシフト」と「混用」という二種類の用語が使われている。いずれも、定義は記されていないが、異なるスタイルの混在という意味で使用されていると考えられる。なお、メイナード（2000）では、文末に用いられる〈だ〉と〈です・ます〉スタイルの他に、対人関係を操作・実現する助詞、話し言葉的な発音の混用も取り上げている（p. 340）。
- 4) 熊谷（2001）では、「……（引用者注：提示した用例について言及）、いわゆる「だ・である体」と「ですます体」の両方が使われている。言語研究では、一つの文章の中にこのような複数の文末表現が混在している現象を混用と呼んでいる」（p. 273）とある。
- 5) 石黒（2005）においても、「丁寧体／丁寧形」「普通体／普通形」の両方が使用されているが、「～体」と「～形」の使い分けの基準は示されていない。
- 6) 野田（1998）では、中立形の文が基調の文体である中立調は、特定の聞き手がない書きことばに使われる、としている（p. 99）。
- 7) メイナード（1991）、メイナード（2000）、メイナード（2004）のいずれも、小説、エッセイ、テレビドラマのBBSといった、書き言葉を考察対象としている。（ただし、メイナード（1991）では、会話も考察対象に含まれている。）

参考文献

石黒 圭（2005）「第5講 丁寧形と普通形の混用の可否」『よくわかる文章表現の技術Ⅲ—文法編—』81-105. 明治書院

- 沖森卓也・半沢幹一（1998）『日本語表現法』三省堂
- 熊谷滋子（2001）「新聞投書にみる文体の効果―「ですます体」と「非ですます体」の混用を通して―」『人文論集』52-1：273-286
- 黒木晶子（2002）「日本語の文章における丁寧体と普通体の混用について―学術論文における謝辞の文章の分析を通して―」『文教国文学』46：90-106
- 黒木晶子（2006）「日本語母語話者が書いた小論文に関する一考察―丁寧体と普通体の混用についての分析を中心に―」『文教国文学』50：65-78
- 中村重穂（2011）「文体混用に関する一考察―「だ・である」体の「です・ます」体への混用について―」『北海道大学留学生センター紀要』15：20-39
- 中村重穂（2012）「文体混用に関する一考察・その2―「です・ます」体の「だ・である」体への混用について―」『北海道大学留学生センター紀要』16：71-92
- 日本語記述文法研究会（2009）「第13部 待遇表現―第3章 丁寧体と普通体」『現代日本語文法7』269-279. くろしお出版
- 野田尚史（1998）「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194：89-102
- 宮武かおり（2009）「日本語会話のスピーチレベルを扱う研究の概観」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』1：305-322
- メイナード、泉子 K（1991）「文体の意味―ダ体とデスマス体の混用について―」『言語』20-2：75-80. 大修館書店
- メイナード、泉子 K（2000）「第15章『キッチン』と『とかげ』における語り手の情意―英訳との比較対照―」『情意の言語学―「場交渉論」と日本語表現のパトス―』327-350. くろしお出版
- メイナード、泉子 K（2004）「6.2. ダ体とデス・マス体：スタイルシフトの表現性」『談話言語学』99-109. くろしお出版

（本学准教授）